

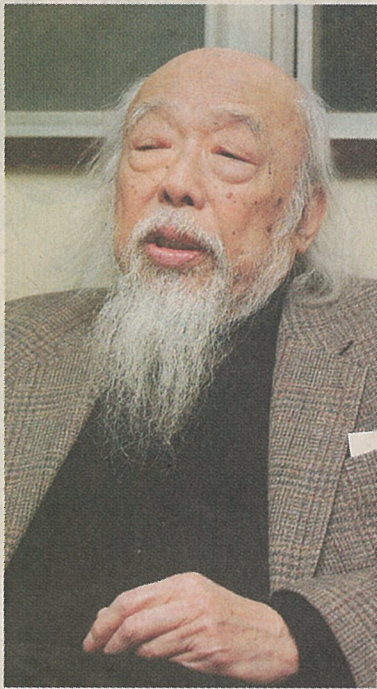
07/03/19

# 人、街に生きる

## 東大学生寮・同志会 ⑤



⑤チャペルで学生たちに語りかける北原さん ⑥「同志会」学生「はひたむきやい風くす心がある」高島さん



# 「感話」に込める思い

東京大学のキリスト教学生寮のとりとめのないことも多い。時「同志会」では毎週、金曜の夜、にはだれも語らず、沈黙が続く。OBも参加する定例の会合が開かれる。チャペルで賛美歌を歌い、祈りをささげた後、しばらく沈黙が続く。法学部四年の

「百年以上、同じやり方で寮が存続してきたのは奇跡だ」。毎週、金曜会に出席する理事長の国際基督教大学教授、北原和夫(左)は語

る。北原自身、勤務先から一時間以上かけて会に出席し、率直に気持ちを語ることが週末の区切りになっているという。

「週休二日制でもない時代に、金曜夜の会合を考え出した先輩たちの感話」を語る。内容は日常

の先見性には感心する」

物理学を専攻する彼がキリスト教にひかれるのは「自然がわれわれが考えているより複雑だから」という。「物理学者は要素が分かれば全体が分かることを理想としているが、実際にはそうでないことが多い。すべて分かれば信仰には結びつかない」という。

金曜会には二〇〇二年に卒業したOBの高山敏充(三)も姿を見せた。パイオ技術の研究所を辞め、新年度から特許庁に転職する。

人生の転機に立ち、「同志会を離れてから価値が分かり、帰ってくる先輩たちの気持ちが分かった」と「感話」で語った。

高島靖(右)は、一九五四年卒業後、日本聖公会の牧師になり、同志会の担当として五十年にわたって学生たちを見守ってきた。

「時代とともに学生の意識は変わったが、同志会の学生には共通点がある。ひたむきさ、それに、世のため人のため尽くす心だ」と、それが、創設者の阪井徳太郎や二代目理事長の石館守三が、自らの生き方を通じ後世に伝えようとしたものではなかったか。

文・清水美和 写真・川北真三

(文中敬称略、この項おわり)